

等とう
慈じ
寺じ
碑ひ

637年頃
(唐・貞観十一年)

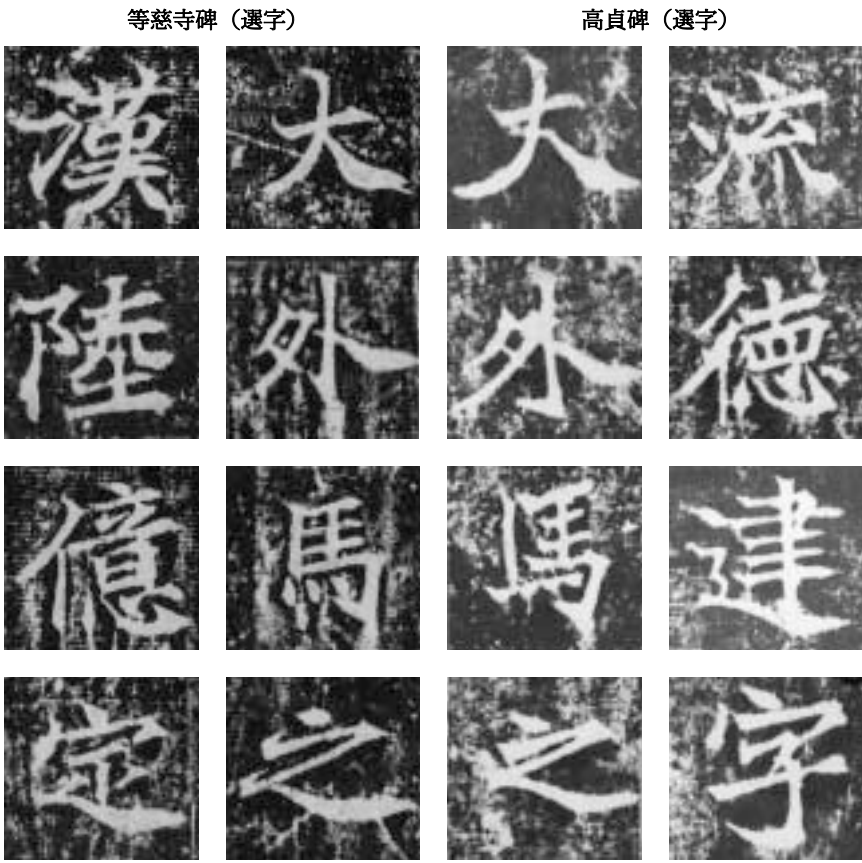
古典碑帖の窓⑧

木 雞

木 雞 室

伊 藤 滋

図② 高貞碑・等慈寺碑書風比較



「等慈寺塔銘」が本来の名称であるが、一般には「等慈寺碑」と呼んでいる。(図①参照) 碑文には建立日時の記事はない。碑文内容から六世紀の初め頃と推定されている。歐陽詢の九成宮醴泉銘などとはほぼ同時代の書である。筆者名は刻されていない。初唐の楷書であるが、一見すると初唐楷書の風は見られない。起筆、転折、払いなどが力強く、文字点画構成もまるで六朝の楷書を見ているようである。昔から、「北魏の書法の伝統を受けた書である」と評されてきた。試みに六朝楷書の代表作『高貞碑』(北魏正光4年・西暦523)と比較してみた。(図②参照) 筆勢には共通するものがあるが、書の趣は大きく異なる。等慈寺碑の方が筆運び、転折、文字構成の面でより定型化している。高貞碑の方は、字形に荒削りの所があり、生き生きした趣を示している。この相違は、ほぼ百年の時間差に因るものであろう。漢時代の隸書と三国時代の隸書を比較すると同じような相違を見ることが出来る。碑額(図③参照)は、篆書体で太い点画を用いて平面を埋め尽くすように書かれている。

等慈寺碑 (選字)

高貞碑 (選字)

図③ 等慈寺碑碑額「大唐皇帝等慈寺之碑」





書道芸術院 平成の書 (2009)

2009 書道芸術院秋季展出品作

91 × 121 cm



〈珍〉

争坐位稿誕生のルーツ



大野祥雲

財団法人書道芸術院
常務理事

唐朝は最盛期を過ぎると複雑な政情となり、やがて激動期に入りました。第六代皇帝・玄宗（685―762）は、則天武后と韋后によって惹き起こされた政治の混乱をたて直し、「開元の治」と称えられる平和国家建設に尽力。しかし、誉れ高い玄宗でしたが、長期の治世につかれ、失政を重ねるようになりました。楊玉環に貴妃の位をあたえたり、楊一族に政治をまかせ、自身は身を潜めることが多くなったのです。

すると今まで玄宗の信頼のもと北方の国境警備担当者として活躍していた安祿山と部下の史思明は黙っていません。二人は反旗をひるがえし、洛陽、長安へと進撃（765）。この乱に対し、義勇軍をあげ、鎮庄に立ち向ったのが平原太守・顔真卿（709―785）でした。彼の活躍と反乱軍の内部対立もあって、唐朝の危機はなんとかまぬがれました。しかし、この乱以降、国力は衰え、政界は腐敗へと傾いていったのです。玄宗から帝位を譲り受けた肅宗は、真卿を温かく迎え、「安史の乱」鎮圧の功により、法務大臣に抜擢しました。

そのころ王朝内の綱紀は乱れ、高官たちが行う儀式での席順は争奪がたえません。礼節は軽んじられ、手のつけようのない状況でした。

真卿は綱紀の肅正のため、広徳二年（764）十一月、中央政府の首位に立っていた、郭英乂に激しい抗議文をしたためました。これが今もお生き続け、私たちの心をゆさぶっている「争坐位文稿」です。

その内容を要約しますと以下のようになります。「英乂はとかく利己的な振る舞いの多い宦官・魚朝恩の機嫌をとって、席順を乱していること。その他、古代の法令や儀式の規定に照らし合わせ誤りが多いことを追及。」こういった多くの史実が記されたものとなっています。

唐朝の激動期に生まれ、波乱に富んだ生涯を送った顔真卿。意志が強く、何事にも潔癖だった性格がもろに出ていた書作の数々。中でも代表作・争坐位稿は書かれて一二四五年。平成の今も、人としての生き方、書芸術の方向を示唆しているように思います。

書のひろば

理事長 恩地春洋

第9回国際書法交流奈良大展

—平城遷都一三〇〇年祭協賛—

二〇一〇年(平成22)は、わが国の本格的な首都「平城京」が誕生してから一三〇〇年に当たります。これを記念して、奈良県を中心に平城遷都一三〇〇年祭が実施されます。

その一環として、毎日新聞社、毎日書道会が国際書展を実施することになり、第一回の実行委員会が10月21日、奈良で行なわれました。

◇第9回国際書法交流奈良大展

漢字は東アジアの共通文化であり、「書道」を通して、奈良の歴史文化の発信と交流を高める国際書法交流大展を開催します。同展は「書のオリンピック」と言われ、一九九〇年、シンガポールで第一回展を開催。日本での開催は一九九五年の東京大展以来、2回目となります。

会期 平成22年10月14日(木)

19日(火)

会場 奈良県文化会館

実施主体

毎日新聞社、毎日書道会

平城遷都一三〇〇年記念事業協会

実施内容

書道展の開催

中国、シンガポール、韓国、アメリカ、カナダをはじめ、参加国約20か国から、各国を代表する著名書家の作品約400点が出品される。

その他

交流書会、講演会など

(以上、記念事業協会パンフレットより)

◇実行委員会協議内容

1、実行委員会の編成

・海外団体との連絡

・図録の団体掲載の配慮、開幕式、歓迎会などのチェック

・東京と関西の役割分担、記念事業協会との役割分担など

2、出品作品

(1)各国、地区出品数の決定

・日本は合計 一五〇点+α

・海外作品 二五〇点+α

(2)出品サイズ

・(日本)

2×8 (タテ使用のみ)

2×6 (ヨコ使用は二段掛も)

3×4 4×4 (縦、横自由)

刻字作品 毎日展一般公募規定に準ずる

・(海外)

・全紙、連落

(3)表装 全て額装(貸し額)

従って出品は未表装のまま

(4)出品料 3万円(表装代含む)

指定表具店による

(5)海外作品の寄贈・返却

作家の意見をとる

3、後援団体、協賛団体の選定

・外務省、文化庁、各国大使館など (申請は東京)

4、図録

・一ページに一点

(出品者には一冊贈呈)

その他詳細 (略)

5、開会式、揮毫会、歓迎会、歓送会 (略)

6、代表者会議

次回開催地の決定

(補足)

本展の事務局は、昨年の第8回北京展で、シンガポール書法家協会から、中国書法家協会に移行され、それに伴い、「国際書法発展連絡会」から、名称が「国際書法家連合總會」と改称された。新しい会則、役員組織(一國・地区から複数会員を認めるかなど)審議未了。中国から議題として提出された場合は審議する。

7、代表団日程

10月13日～16日(3泊4日)

10/13 各国代表団到着 出迎え

(水) ホテル日航チェックイン

参加団体受付

市内観光

10/14 9:30 開会式・テープカット

(木) 記念撮影 文化会館

11:00 席上揮毫

(昼食)

14:00 講演会

18:00 祝賀会 記念品交換

H日航奈良「飛天の間」

10/15 10:00 代表者会議 H日航奈良

(金) (昼食)

午後 奈良観光(バス用意)

19:00 歓送会

10/16 チェックアウト

(土) 各国代表団帰国

関西空港まで見送り

△その他▽

◇ウィーン展とワークショップ

谷脇梅翠さん担当のウィーン展とワークショップは本年12回、スロバキアは2年目、助講師早村春鶴さん他、9・28～10・2まで訪埃。

◇辻元大雲毎日書道顕彰祝賀会

10月6日、帝國ホテルで四〇〇名の来賓、会員の祝福を受けて盛会

詳細は別掲の通り。

◇鈴木桐華遺作展は代表作を集め光彩を放つ。

10月13日偲ぶ会は東京会館

関西では上田桑鳩による飛雲会創立

70周年、63回展では物故作家、桑鳩、雪村、清洞ら奎屋会巨星の作品と現

役作家の力作が10月16日～18日まで

新装なった原田の森ギャラリーで。

祝賀会盛会。

前衛書 (二)

千葉 蒼 玄

書の特徴とは単純にいうと(絵とか他の芸術との違いは)

- 1、1回性がある
- 2、白と黒の美である
- 3、線に思いを込められる

(形に想いをこめる)

などがあげられる。1、2については他の芸術でもその要素は見られるので必ずしも書独自というわけではない。たとえば1回性というと音楽などが考えられる。白と黒の美であればモノクロームの土門拳の写真などもそれに属するだろう。私は3が書独自のものがあり、ほかの芸術と大きく異なるものだと思っている。

高村光太郎は書の特徴を「形と意味とのこんがらがり」と表現しているが、書はその書く形に意味(想い)と造形美を同時に詰め込むことが出来るということなのだと解釈している。

文字の形を書く漢字、近代詩など前



ソウルビエンナーレ出品作品

千葉蒼玄書

衛以外の部門では「形」と「意味」といえるが、文字造形を必ずしも主体としない前衛書にあつては「線」という考えを持っている人が多い。(文字を主体としないということとは、必ずしも文字を否定するわけではなく、規制の文字造形(既成概念)から離脱するために現在の字形から離れるということだが、読めなく書くのが前衛書だと短絡的に理解している人が多いようだ)前衛書の場合、文字の形を主体としない分その「造形(線)」に込める想いが強くなければ、しっかりとした作品は出来ない。掲載のものは海外展に出品の作品、単純な一本の形にいろいろな要素を盛り込んだ。題名は「崩壊」と名付けた。一本のコンクリートの柱に上下から圧力をかけ、崩れる折れる瞬間をイメージした。素材はケント紙にポスターカラーと墨を混ぜたものを使用。新しい素材に挑戦することも前衛書の一つだと考えている。

21世紀の書

—私の主張—

漢字 (二)

前田 龍 雲

「どんな古典が好きか？」とよく尋ねられます。好きな古典は数多くあり過ぎて答えにくく、いつも困惑します。

時代背景や書かれていた内容などを調べていくと、余計に定まりません。直線が好きか、曲線が好きかと問われると、迷わず前者。書ける、書けないは別に、行草体より篆隸楷書。

行草体でも明清調の直線を多用しているものについて目がいってしまいます。せっかちな性格ゆえ、どうしても行草体は走り書きというか調子書きになってしまいがちです。

以前は「形」重視で臨書していましたが、最近「線」を意識しています。特に強い線質で、できるだけ丁寧に書くよう心掛けています。強いといってもあからさまにひけらかす強さではなく、内柔外剛の線がでないものかと思っています。王羲之の逸話で、「入木」というのがあります。羲之の筆力はとても強く、木版に書かれた字を大工が鉋で削ったところ、墨が木に三分(約九ミリメートル)も染み込んでいたといわれます。あくまでも逸話ですが、それほど強い線質を臨書で学び、再現してみたいものです。



2009年 美を継ぐ者たち展Ⅱ 出品作
前田龍雲書

書道芸術院秋季展

審査会員選抜作品
審査会員候補公募作品

会期 平成21年10月6日(火)～10月11日(日)
会場 東京セントラル美術館

秋季展実行委員長

小浜 大明

平成21年度秋季展は、銀座セントラル美術館五階で10月6日から11日まで行われました。今回は会場のレイアウトを一新し、新たな気持ちで開催されました。

今回展も昨年同様、書道芸術院の役員と審査会員選抜、峰雲賞受賞者の各先生方の作品に加え、審査会員候補の皆さんから公募で集められ、選考の結果入選、入賞された皆さんの作品が展示されました。

10月6日には恒例の研究会が、表彰授与式の後行なわれました。辻元大雲先生の進行により、秋季菊花賞受賞者の制作意図や感想が述べられました。その後選考委員の先生方から次のよう

な助言がありました。

大野祥雲先生―作品からうったえるものがあり、見る者に迫ってくる、このような作品が入選、入賞している。

下谷洋子先生―作品には、ぱっと見た時光るものが必要、その要因には線の強さや線質、余白等が大きく関わってくる。辻元大雲先生―現代詩文書は詩の内容を大切にして表現したい。また多彩な表現はよいことだが、まずは足元をみつめて。宮沢梅徑先生―刻字の出品一点であったが、素晴らしい作につき入賞した。次回は多くの出品を希望する。浜谷芳仙先生―文字全体の形も大切だが、一字の中に多彩な書線の表現が必要。等の助言がありました。

最後に恩地春洋先生から、今後の書作の指針となるお話しをいただき終了しました。

書道芸術院秋季展〈審査会員候補公募状況〉

部	出品点数	出品人数	秋季菊花賞	入選
漢字	129	76	4	19
かな	15	14	1	3
現代詩文書	86	52	2	10
前衛	79	45	2	11
篆刻・刻字	5	5	1	1
合計	314	192	10	44



恩地理事長あいさつ



授与式



一新した会場入口

道



常任総務 大井 美津江 60×180cm

山頭火句



常任総務 畑 中 弄 石 90×120cm

峰の風



常任総務 大辻 多希子

178×54cm

花間一壺酒



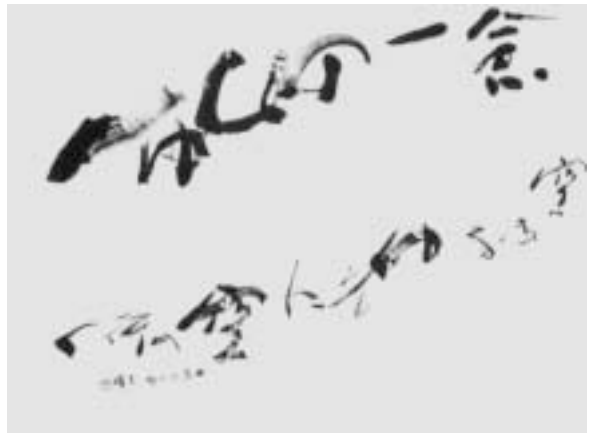
常任総務 加藤 如 石 50×70cm

京都



常任総務 西岡 雨 瑤 53×160cm

〈風の一念〉



常任総務 大平 邑峰 90×120cm

〈潤〉



常任総務 濱田 尚川 90×90cm

〈路上〉



常任総務 田村 澄子

180×52cm

〈七言二句〉



常任総務 半田 藤扇

175×53cm

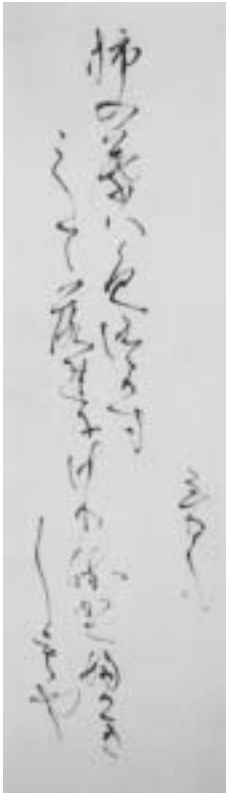
〈刻(するどし)〉



常任総務 新井 京華

182×91cm

〈柿の葉〉



常任総務 木村東舟

178×53cm

〈呉學炯詩〉



常任総務 木村英峰

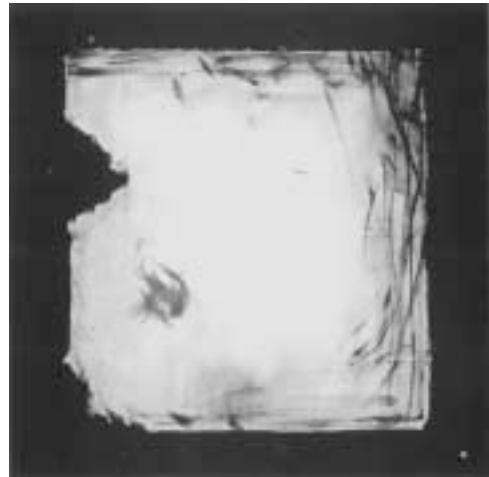
177×56cm

〈アルシノエ〉



総務 工藤永翠 61×182cm

〈胎動〉



常任総務 真下京子

105×105cm

〈長谷川権の句〉



総務 山崎掃雪 89×118cm

特集：書道芸術院秋季展

〈俊太郎詩より〉



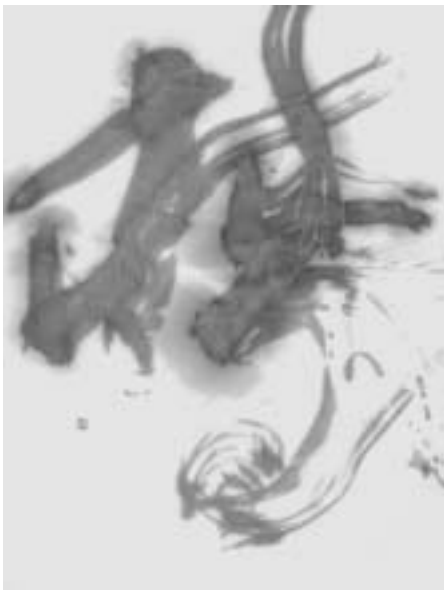
総務 大隅 晃弘 88×118cm

〈攀龍鱗〉



常任総務 東 福 青 篁 84×110cm

〈夢〉



常任総務 飯田 春香

120×90cm

〈無為のとき（自詠）〉



常任総務 尾形 澄神

180×60cm

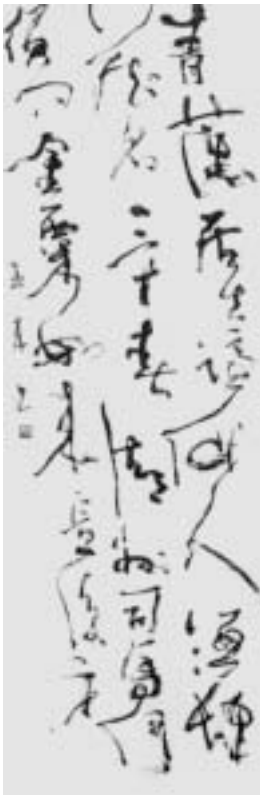
〈山家初秋〉



常任総務 山藤 美知子

170×60cm

〈答湖州迦葉司馬問白是何人〉



常任総務 高田春來

165×53cm

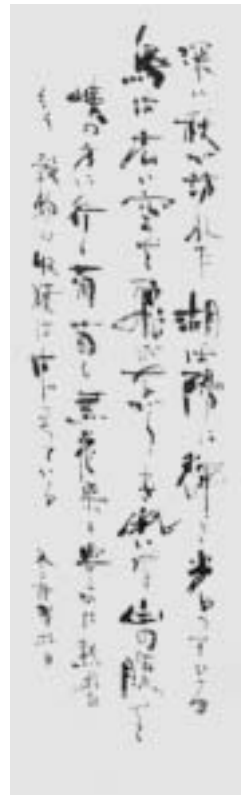
〈SIN—こころ〉



常任総務 太田蓮紅

180×60cm

〈冬二詩〉



常任総務 狩野翠桂

178×53cm

〈静〉



常任総務 石田春窓

120×90cm

〈吉田加南子の詩〉



常任総務 田村鄭雲

120×90cm

〈傲〉



常任総務 平岡 千香子 68×172cm

〈手紙―拝啓十五の君へ〉



審査会員 椎木 山風 55×174cm

〈岳陽樓記〉



総務 井上 始源

182×53cm

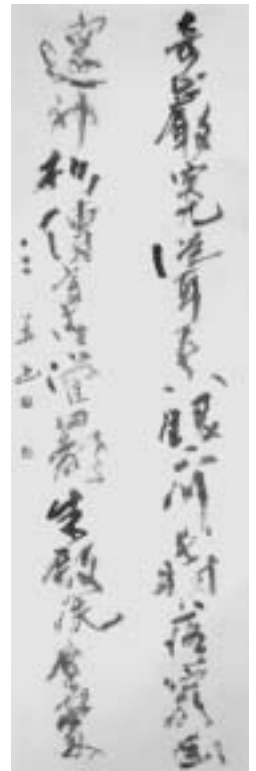
〈わかうど〉



審査会員 中島 翠卓

182×61cm

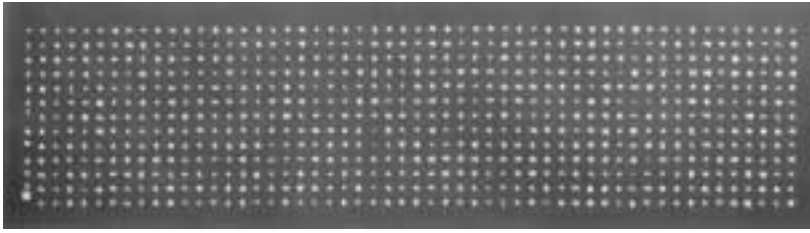
〈訪妙義神社〉



審査会員 橋本 三華

176×53cm

〈老子 徳經〉



蜜波羅 鳳雲 49×172cm

秋季菊花賞

審査会員候補

〈運〉



諸富玖扇

121×90cm

〈華〉



相内珠莉

182×61cm

〈空〉



阿部恵泉

170×53cm

〈泰山之安〉



大沼樵峰

135×36cm

秋季菊花賞

審査会員候補

〈山本英子の歌〉



及川祥空 61×182cm

〈楽遊原〉



小竹正高

90×120cm

〈つれづれに〉



九條純代 53×166cm

〈渚〉



角田悠香 61×180cm

〈両枝〉



安藤華祥

180×58cm

〈解説〉喪乱帖は、羲之書法の完璧なる最高の傑作であり、やや緊張したおももちで、左右の張りをもちせながら次第に軽やかに流麗に展開している。用筆、造形の多彩ぶりには目を見張るばかりで、毛筆の機能を

極限まで使いきっている。ところどころに三井本十七帖や書譜にみられる、刀で切ったような鋭いタッチや直線的な点画があらわれている。

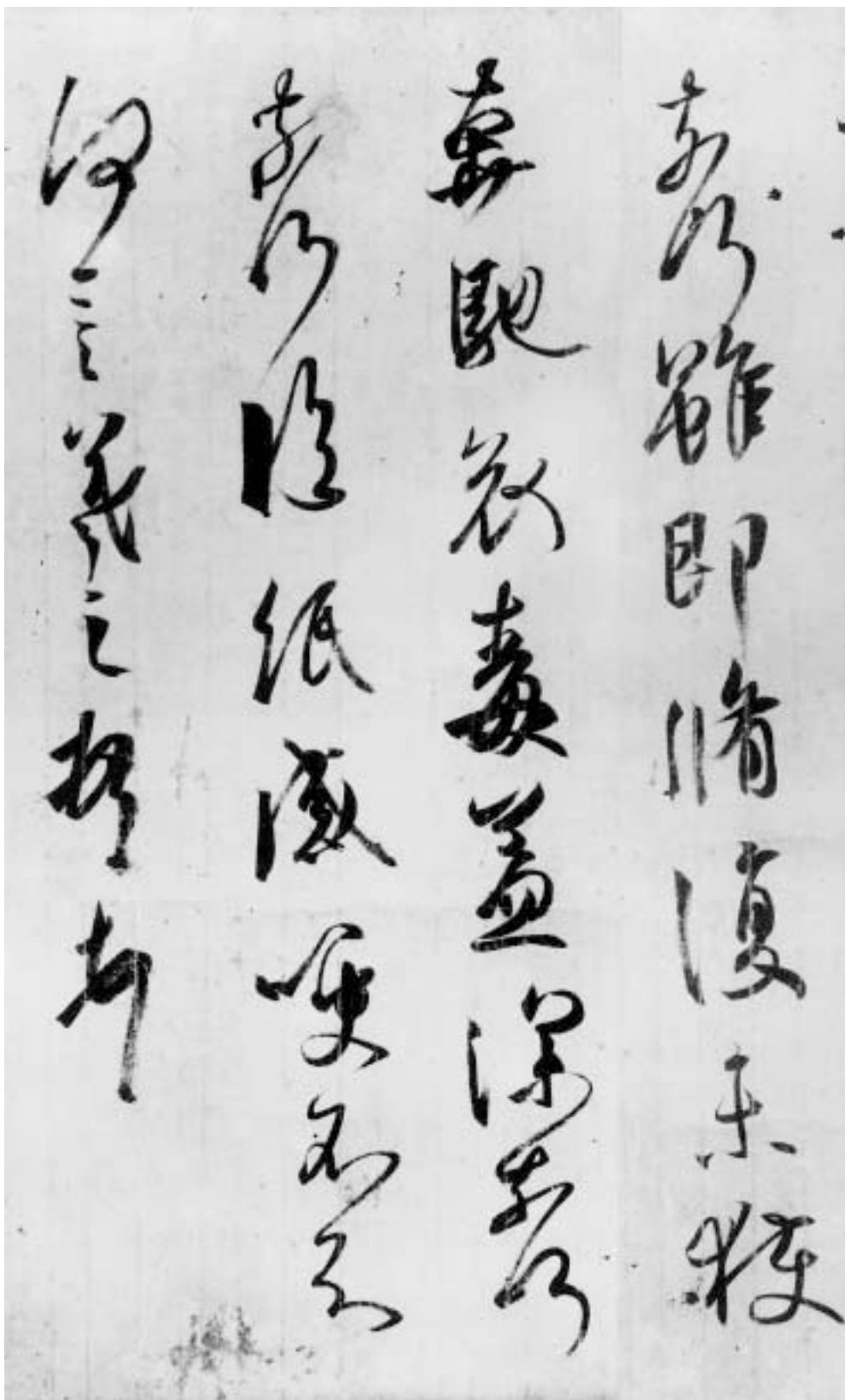
（編集部）

漢字研究部競書作品は、左の法帖の中から何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

※落款を必ず入れる

署名、もしくは〇〇臨

（押印のみ可）



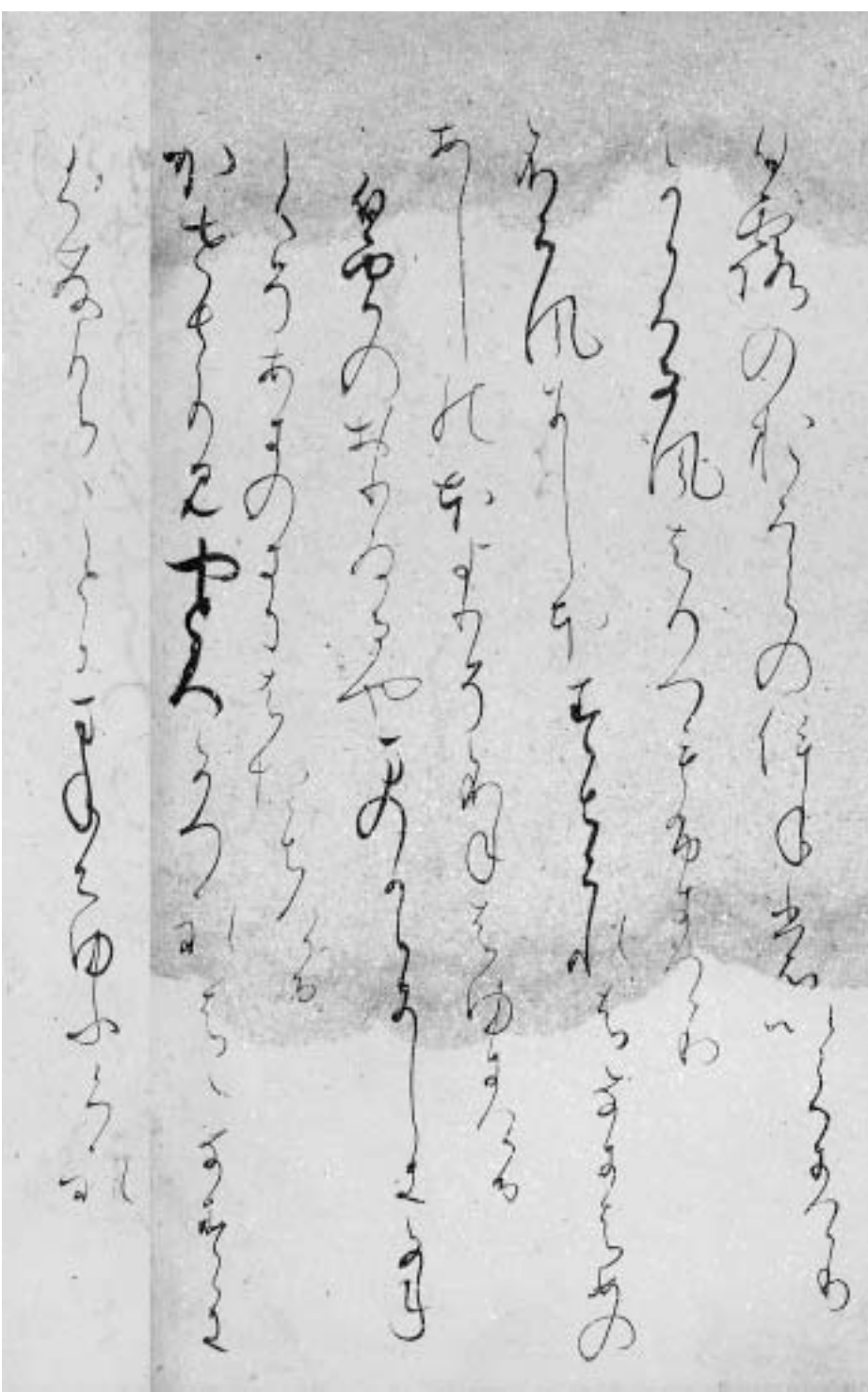
奈何。雖即脩復。未獲／奔馳。哀毒益深。奈何／奈何。臨紙感哽。不知／何言。羲之頓首頓首。

〈よみ〉
 白露しらゆきのおくてのいねもでにけり
可かりくる風はむむべもふきけり
不かりくる風はむむべもふきけり
あしのほよりぞふねはゆきける
あしのほよりぞふねはゆきける

白雲しらぐものおりあるやまのからにしきかね
可あきのきりはたちける
かぜさむみやどへかへればなすき
くさむらごとにまねくゆふぐれ

〈解説〉掲載のうた、「白露の……」などは、自由奔放な筆致で一字一字の字形よりも、全体の流れを重要視したため、字形が若干乱れ大胆なぐずしである。誤字・脱字について何箇所かは訂正など補ったりしている

ところもあるが、留意せず書き進めている。平安時代における王朝貴族の和歌に対する異常なまでの関心の高さを考えると、注目すべき事実である。「香紙切」の書風と共通する雰囲気をもっている。(編集部)



※上記の掲載歌一首以上を書くと(全臨も可)

用紙
 ・半紙普通判
 (料紙可)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○○臨(押印のみも可)

漢字規定 初段以上 【十二月十一日締めきり】 用紙 半紙普通判

辻元大雲 選書



蘭秀菊芳

よみ（蘭秀^{ひい}で菊芳^{なほ}し）

書体Ⅱ自由

習い方解説 (二)

辻元大雲

蘭秀菊芳
(蘭秀^{ひい}で菊芳^{なほ}し) 韓鄂歳華

今回も秋の四字句を行書表現として参考例を書いてみました。使用した筆はやや硬目の白狸小長鋒です。鋒先の鋭さが切れ味をよくして、爽快な表現に向きます。運筆のリズムは軽快に、筆圧も軽やかにして細身の線の動きがこの表現のポイントです。草冠が三文字あり工夫を要するところです。参考例はいろいろ形や筆順を変えてあります。筆順により字形も大きく変わります。蘭の門構え、菊の米部分など要注意です。

漢字規定 秀級以下 【十二月十一日締めきり】 用紙 半紙普通判

小伏小扇選書

臨池之志

小扇書

臨池之志

よみ (臨池の志)

書体 楷書

習い方解説 (二)

小伏小扇

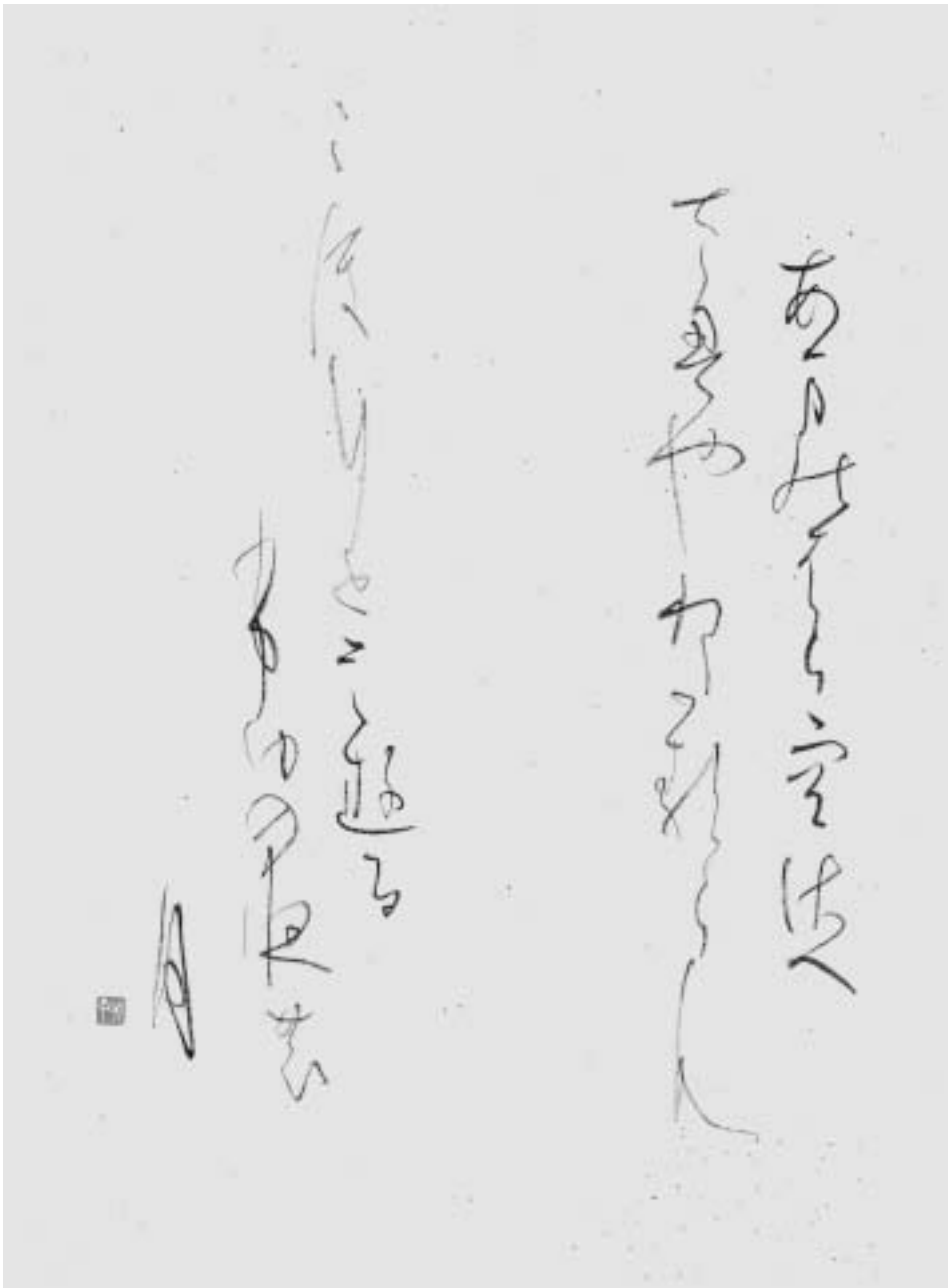
臨池之志
(臨池の志)

書への向学心。書譜の中に「張芝が能書に達したのは池の水が墨で真黒に変わるほど精進努力したからだ」と記しています。

「臨」隣の三つの「口」は大きさがそれぞれ異なる。

「池」終画の浮鷲は短かく慎重に。
「之」終画は次第に筆圧を加え重厚にはねる。

文字の構成に注意。之
「志」土と心は面積を上下に二分する。土ではたて画に注意。心は二筆目を慎重に。



習い方解説 (二)

石井明子

天の原空さへさえやわたるらん
こほりとみ^{えせつぎ}とみ(三)ゆ(遊)るふ(布)ゆの夜(農)月

(愚慶)

冬の夜の月を氷にたとえ、夜空の冴えの美しさを捉えています。作者は平安中期の歌人ですが、詳細はわかっていません。

伸びやかな表現は、あらゆる意味で私にとって重要なテーマです。構成は紙面が大きく見えるように、文字は萎縮しないように心がけます。大らかさが間延びになることは避けたいですね。

殆どの歌、俳句に何文字かの漢字を使用しますが、かな文字との調和が問題です。部分が異質にならず、最後まで目が自然に流れていくような表現を目指したいものです。

漢字の参考に左記を使用すると便利です。お奨めします。

○和様字典 北川博邦編 二玄社
三、二〇〇円

よみ方 あま(万)の(能)は(者)ら空(佐)へさえ(盈)やわた(多)る(類)らん

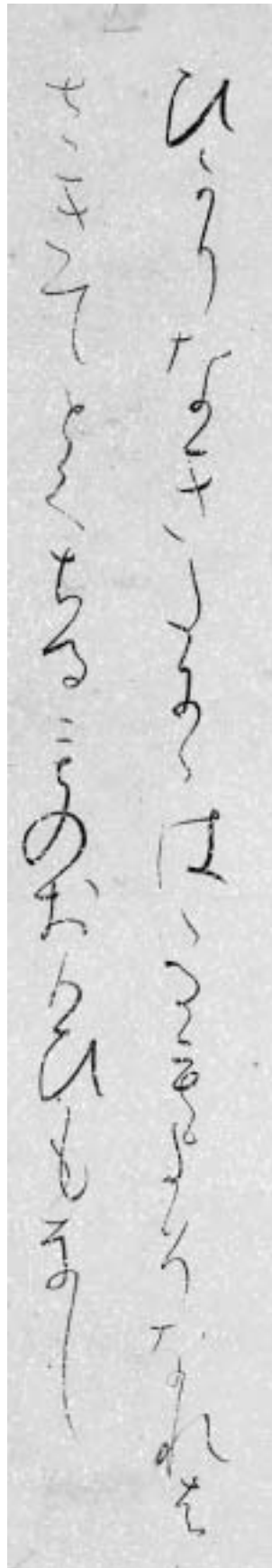
こほりとみ(三)ゆ(遊)るふ(布)ゆの夜(農)月

創作

かな条幅規定 秀級以下 【十二月十一日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 ひか(可)りなきた(多)に(尔)はるも(毛)よそ(曾)なれば(者)
さきてとく(久)ちるも(毛)のおも(无)ひもな(奈)し

習い方解説 (二)

天海 矩子

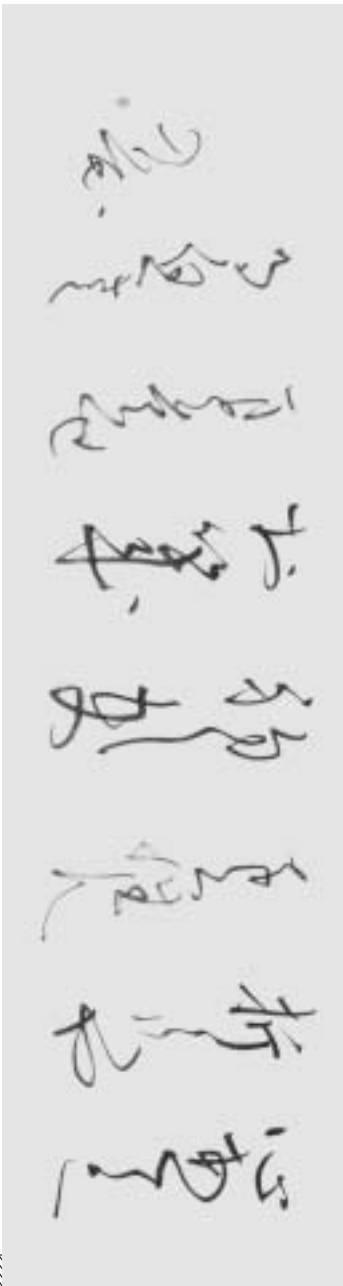
心あてに折らばや折らむ初霜の
おきまどはせる白菊の花
(古今集)

初霜にまぎれるばかりの、真白に美しい白菊の様子をうたっています。

半切横書きは一行の文字数が少ないため流れを作りにくい。今回は行書きにしました。文字の大小、筆圧、墨つぎ等で強調したい所を作り、立体感を出してみる。左右の行とのバランスも大切です。

かな条幅規定 【十二月十一日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

天海 矩子 選書



よみ方 心あてに(可)を(折)らば(八)やを(折)ら(羅)む(无)初しものおき(幾)

ま(万)どは(者)せる白きく(久)の花

創作

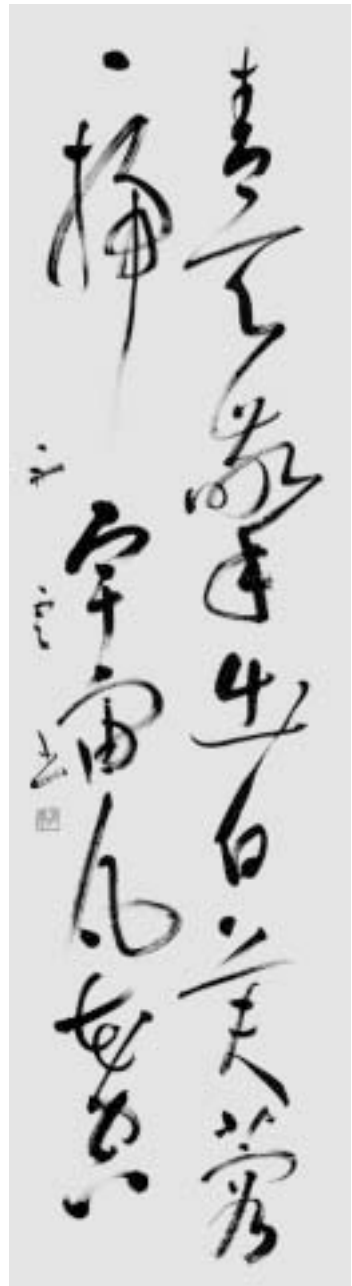
出品券

貼付位置

*よこ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上【十二月十一日締めきり】用紙 小画仙紙半切

広瀬舟雲 選書



青天撃出白芙蓉 一掃宇宙凡花空
(青天に撃^さげ出^だす白芙蓉 宇宙の凡花を一掃^{いっそう}して空^{くう}す)

書体||自由

習い方解説 (二)

広瀬舟雲

寒く冷え込んでくると、晴れた朝、富士山がなぜかいつもより大きく一層くっきりと姿を現します。「白芙蓉」とは富士を形容した語です。兼毫筆を用い、すっきりとした線で、連綿草を基調とした作品を揮毫してみました。実線と連綿線を意識して書かないと、誤字になってしまいます。作者の無隠道費は、江戸時代の禅僧です。

漢字条幅規定 秀級以下【十二月十一日締めきり】用紙 小画仙紙半切

横谷尚恵 選書



楓葉経霜紅 (楓葉、霜を経て紅なり)

尚恵書

書体||自由

習い方解説 (二)

横谷尚恵

楓葉、霜を経て紅なり
句意「度々重なる修練を経て、その極めを至す。」
好きな古典から集字してみることをお勧めします。

私のお墓の前で
泣かないでください
そくに私はいません
眠ってなんかいません
千の風になってよう

書

用紙はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体は自由

習い方解説 (二)

川島舟錦

「この歌を聞いて泣いたのは、悲しかったからではありません。むしろとても懐かしいというか……。聞いているうちに、暗く曇っていた心の窓がだんだん晴れてきて、まるで幼児の頃のような無垢な気持ちにかえった時、突然、どっと涙があふれてきて止まらなくなりました……。」(新井満著「千の風になって」より)

題材がいいので、何回練習しても新鮮に感じられます。余分の力を抜き、リズムや気脈を大切に書いてみましょう。

※落款を入れ忘れないようにしてください。(落款は自分の名前を入れてください。)

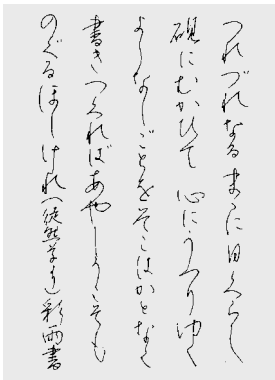
木一作品
各部総評

NO. 581

ペン字部 師範 吉瀨 彩雨

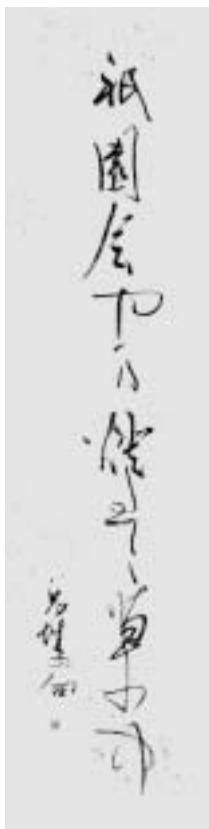
優雅な字形と切れのよい連綿によって、流麗でかつ躍動感あふれる庄巻の作となった。

◎ペン字部総評 字形よく流れのある作品が多かった。基本をしっかり習得し次のステップへ。自己流にならないように。(孝子評)



かな条幅部 二段 小暮 昭二

嫺やかなリズムと全体のバランスがばかしの加工紙に巧く調和し、幽かに艶めいた優麗な趣が出色。
◎かな条幅部総評 比較的誤字は少なかつたが、「万燈」は漢字で書きたいですね。かなに置き換えると句意が損なわれるかと。(洋子評)



前衛書部 特選 梅山 久子

大胆な構成で紙面を線が縦横無尽に走っている。三つの点がこの作品のキーポイントかな？

◎前衛書部総評 作品から創作意欲と技術の向上の跡が見えた。楽しく書作する意義を。(蓮紅評)



漢字条幅部 師範 岩崎 蘆風

着実な運筆で筆先よく利き、線の響き高くバランスのよい隷書で安定感がある。

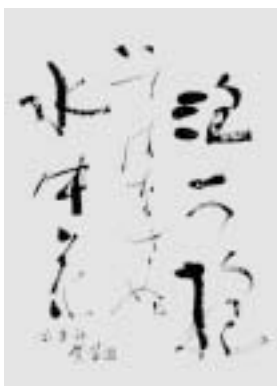
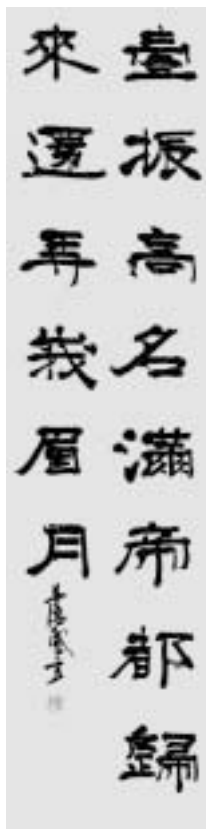
漢字部 師範 王子谷 焯水
勢いのある運筆のリズムが潤濁の変化を生み、紙面に動きを与えている。さらに余裕が生じれば。
◎漢字部総評 紙面構成の工夫は半紙の場合ほぼ決った形となりやすいが、大小、潤濁の変化、運筆のリズムなどにさらに研究を。(大雲評)



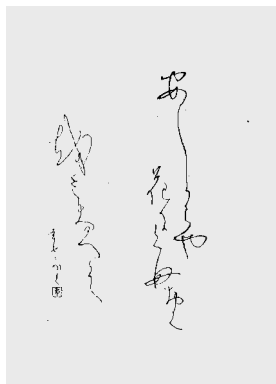
かな部 師範 堀切 幸雲

布置よく汲みない線が創り出す世界は爽やかで、美しく典雅です。さらに創作へと向ってください。

◎かな部総評 斬新な構成の手本をよく学び、個性溢れる作多く楽しんで拝見した。さらにかなに適した用紙、墨の研究を。(明子評)



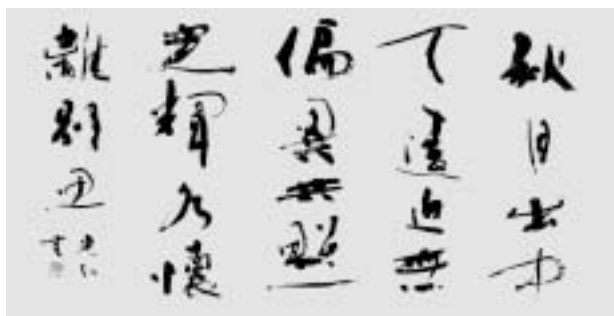
◎漢字条幅部総評 自由に心の叫びを表現する事は乱暴に書く事ではない。先人の研究を無にしないで、誤字は慎しむたい。(春洋評)



特別研究部
優秀作品(特選)

漢字
(大雲)

大隅晃弘
「秋月」



70×135cm

大隅晃弘書

◆思わず口ずさみたくなる様なリズムを感じる。漢字書から受ける重圧感がないのは筆・紙・墨と一致した動きの中に生かされているからか。

(倫子評)

◆ゆったりした行間と蔵法の丸味のある線質が暖かさを醸し、細い線も書線として語りかけてくる本格派。今後の動向を注目したい。
(春洋評)

◆飄々とした大らかな雰囲気、味わいある作である。暢達した線が余裕を感じさせ、技術の高さを見せるが更に厳しい牙えある表現を期待。

(大雲評)

◆シンプルな造形と広い行間で、気宇の大きさがか存分に発揮されている。鍾繇や木簡の姿も窺え、間の扱いにも字書の深さがにじむ。

(洋子評)

前衛書

(蓮紅) 一條紅蕭

「生命」

◆躍動する生命感が伝わってくる。上、中までは圧倒的な力、下部の大きな形象の中の○はやや自然な動きの中で不自然だと思いが如何?

(春洋評)

◆独特の墨色が単なる白と黒だけではない幽玄な雰囲気を出現させ、大胆な筆致が広がりある世界を感じさせる。墨色やや濁りすぎたか。

(大雲評)

◆覇気に満ち、生命と真摯に向き合う姿が見て取れるが、少々気迫に押されてしまう。動きが複雑なだけに、墨の彩りがやや気になります。

(洋子評)

◆題名から想像すると毎日を激しく速度をつけて過ごしているのですか。何処かで一呼吸する安らぎの所があってもよい生き方もあるのでは。

(倫子評)

総評

日本画の大家、速水御舟は徹底した写実・細密描写で写真と見まごうばかりの初期作品を残している。傑作の一つである「炎舞」は蛾と炎の幻想的な表現で重要文化財に指定されている。蛾は細密な写真的細密描写、炎は象徴的な不動明王の炎を思わせる造形が目を引くが、それを支えているのは背景となる漆黒の「闇」だろう。この黒は単純な黒ではなく人を引き込む魔力を持った黒である。私たちの墨の黒もこうありたいと願う。

今回は68点(漢18、か7、現22、前21)少々停滞気味か? 出品点数も減である。普段からの挑戦が新しい作品を生み出す。新人の出品を期待する。

(蒼玄)

〈特選候補者〉

漢	大雲	江本 興舟	現	翠柳	加藤	紫翠
〃	華祥	安藤 華祥	前	四谷	鈴木	白鷺
か	水壑	伊澤 香雨	〃	蓮紅	浅野	彩紅
〃	書泉	山本由美子	篆	東総	平野	草堂
現	もく	西川 藤象				



一條紅蕭書

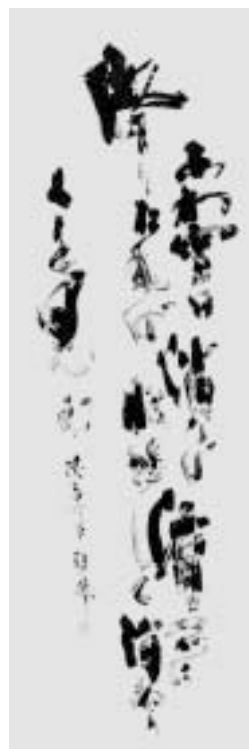
180×60cm

現代詩文書

(恵雅)

板橋雅邦

「茂吉のうた」



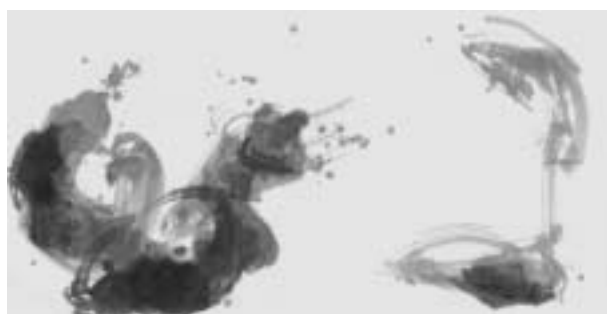
板橋雅邦書
176×58cm

◆重量感ある潤筆部と二本筆による破筆、渴筆がリズムを醸し、動きある表現となった。やや厚手の用紙の特性を生かし、立体感ある作。(大雲評)

前衛書

(四谷) 角田悠香

「初秋の香り」



70×136cm

角田悠香書

- ◆沈滞する左側に対して、軽妙な右側、一見つながりがない様に見えて、危いバランスでまとまる。発想の自在さとリズム感の豊かさが魅力。(洋子評)
- ◆淡墨の中に動きを取り入れ左右のバランスが上手に生かされている。筆の勢いに少しうわついた感じがするが、リズムが旨く表現されている。(倫子評)
- ◆左の主要部がどっかりと構えて右が軽く受けて不思議な明るいムードを醸している。墨か紙の都合か、やや墨色が浅くなったのが惜しい。(春洋評)
- ◆秋季菊花賞の作とは又一味違う作で多様な表現へ挑戦する姿勢を買う。左から右へ、中央部を大胆に空けて広がりを出す。懐抱広い作。(大雲評)



長島優雨書

45×172cm

現代詩文書

(大雲) 長島優雨

「坂村真民詩」

- ◆リズムを取りながら口ずさみながらの制作でしょうか。ゆったりとした雰囲気を与えてくれます。でも底から感じる激しさもチラッと感じます。(倫子評)
- ◆行間をたっぷりとした伝統的な手法ともしれば、かなの細線が寂しい気もあるが、濁った青墨のにじみが線を沈めて深い味わいを醸す。(春洋評)
- ◆宿墨の潤みが効果的に作用し、構成の平凡さに変化と動きを与えている。柔筆筆の多様な味わいが微妙な雰囲気を出して妙。(大雲評)
- ◆今回のもう一点の現代詩文書と対照的な作。淡々と書きながら自分の中の韻をこころがして楽しむような趣。神秘的な墨色が詩に寄り添う。(洋子評)

- ◆判読しにくい点はあるが、陰影の強い作品で印象深い。これだけの超濃墨でリズムを供って書き綴るのは至難の技、白の変貌振りを評価。(洋子評)
- ◆墨だまりとかすれを筆の動きに合わせて表現し、その集合が作品全体に変化を見せてくれる。その中に自然と見る者の心をゆさぶるよう。(倫子評)
- ◆大胆な墨の潤濁と線の大小で構成する。やや読みにくい崩れた字形もあるが、訴えてくるエネルギーを大切にしたい。更に研究を深めよう。(春洋評)

漢字研究部
(書譜)

選評 村野大仙

今月のホープ作品



岩上郁子

漢字研究部 特選 岩上 郁子

軽快な運筆で流れがスムーズだ。自然さに魅力を感じた。筆の抑揚を生かした太さの変化も原本の雰囲気を出している。ただ起筆や転折の一部で甘い用筆が見られるのは残念。筆鋒の動きに今一つ心遣いが欲しい。

◎漢字研究部総評

臨書作品が人によって様々であっても当然かもしれないが未熟さからくる様相は別問題

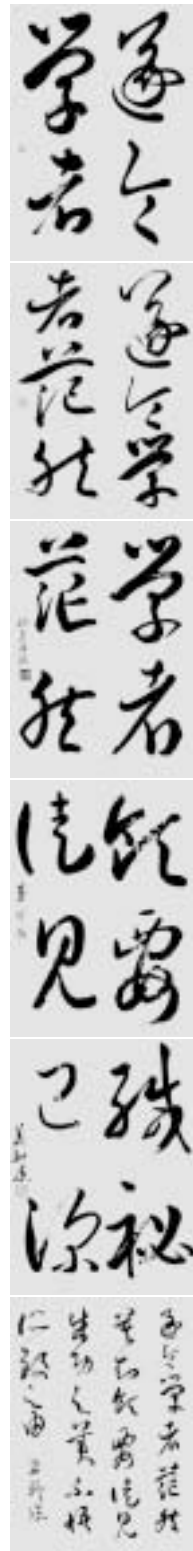
だろう。それが更に指導者に因ずるとしたら大きな責任を負わなければならない。書譜は羲之の書法を継ぐものと認知はしても筆が実働しなくては書作には意味をなさない。またそれを克服することも容易ではない。簡単に出来た、分かった、卒業だとして慢心、怠惰は禁物、常に自分の未熟さを戒め学び続ける姿勢を忘れてはならない。これは指導者の最低の責務。 一指導者としての自戒の念。



湖悦里琴翠 舟也子美子 輝径



一須桂清 子紅美彩麗 香



直美裕美 子佐美子 子竹 美知子 登



雅谷柳幸史 邦恵苑子 篁扇

